

美術鑑賞授業モデルの開発 - ICT を活用した言語活動(発話・書く活動)の活性化を通して -

臼井昭子(山形大学 産学連携准教授)

研究の背景と目的

美術科では「鑑賞」が重視され、さらに言語活動を充実させるよう学習指導要領に示されている。筆者らは、ICT 教具を活用して鑑賞の言語活動を活性化させる取り組みを行ってきた。2016 年度の研究では、教具のインタラクティブな機能によって発話が活性化される傾向があることを示した。また、全国調査を実施し、教員らは教具に、作品を実物大で多方向から鑑賞できる機能を求めていることを明らかにした。そこで、本研究ではこれまでの研究をさらに発展させるために、(1) から (3) の 3 つの研究を行う。(1): 作品を実物大で多方向から鑑賞できる ICT 教具の開発。(2): 鑑賞の学習における言語活動の先行研究と評価法等の調査。(3): 開発した ICT 教具と従来型の教具を活用した授業とを比較し、生徒の言語活動(書く)の特徴の分析。これら 3 つの研究を通し、最終的には ICT を活用した美術鑑賞授業モデルの開発を行う。

研究(1) 作品を実物大で多方向から鑑賞できる ICT 教具の開発

HMD(ヘッドマウントディスプレイ)とパソコンとを有線をつないだ VR 機器は教室での使用において簡便性に優れなかったため、パブリックアートを天球カメラで撮影し、その動画を簡易的な HMD に差し込んだスマートフォンで再生する VR 教具「モバイル VR-SM」を試作した。生徒と教員にモバイル VR-SM を体験してもらい評価してもらった結果、モバイル VR-SM は、実物大で多方向から鑑賞することができる提示手法であることが示唆された。また、簡便性の点でも好意的な評価が多く日常の鑑賞の授業で簡単に使える教材であると考えられた。

研究(2) 鑑賞の学習における言語活動の先行研究と評価法の調査

学習での言語活動は目的か手段かに関する研究、美術科における言語活動の領域等に関する研究についてレビューを行った。さらに、鑑賞の授業の評価法について調査した。また、美術科の授業での教師の発話と生徒の記述に関する探索的な検討を行った。その結果、鑑賞の学習は言語活動によって展開されており、言語活動の成果は、評価の資料として活用されていた。また言語活動の成果(話した内容、書いた内容)を分析し評価するには多大なる労力が必要とされていることが明らかとなった。

研究(3) ICT 教具を活用した授業実践

従来型の教材である写真を用いるクラス(AB 群)とモバイル VR-SM を用いるクラス(CD 群)に分けて授業実践を行い、生徒が授業でワークシートに記述する語に違いが見られるのか等について検討した。その結果、AB 群と CD 群とで生徒が書いたワークシートの内容を比較・分析したところ、総語数、異なり語数、生徒一人の平均の文字数について有意な差は見られなかった。一方で、CD 群では、作品があるその場で作品を鑑賞しているような語が多く用いられる等の特徴が見られ、授業後の質問紙調査からは、CD 群の方が授業への興味・関心も高く没入感も得られていたことが示された。また、授業を実践した教員は、CD 群の方が、話し合う活動やワークシートに記述する言語活動を通して新しいイメージを想像し味わうということを生徒一人ひとりが達成できていたと述べていた。

まとめ

2016 年度の研究と本研究で提案した ICT 教具は、美術作品を 2D や 3D のデジタルコンテンツにして提示し、いずれも生徒が自分の意思に基づいて主体的に作品とインタラクションし鑑賞することを実現するものであった。VR 等の ICT の活用は、生徒の多様な鑑賞の仕方を支援し、そのことが、生徒の興味・関心を高め、より主体的な鑑賞へつながった。また、多様な見方は、対話の活性化や書く活動にも反映され、深い学びが起これと考えられた。ただし、教員や生徒が簡便に用いることができるように工夫することも ICT を活用した授業を行う上で重要な要件であると思われた。ICT を活用した美術鑑賞授業モデルを右図に示した。

本研究の今日的な意義は、鑑賞の学習において ICT 活用の有用性を検討し、主体的で対話的で深い学びを実現するための授業改善の方法の一つを示した点である。なお、教室における ICT 活用の安全性、規律性については、より深い検討が求められる。【共同研究者 佐藤克美(東北大学 大学院教育学研究科 准教授)】

